

個と集団への効果的な支援を目指して

～小中連携を軸として～

越知小学校 教諭 問可邦子

1 はじめに

越知町は四国の屋根、石鎚山系の山々に恵まれ、仁淀川の波光のきらめきが明るく、横倉山やコスモスなど豊かな自然に恵まれた風光明媚な町である。

ところが近年過疎化の波には勝てず、町の人口も減少の一途をたどり、現在総人口は6,600人余りとなっている。また、地域に5小2中あった学校も、平成19年度からは、越知小学校と越知中学校の2校を残すのみの状態となっており、現在、児童生徒数は小学校253名、中学校131名である。

町内2校になったとはいえ、小中学校間に「連携」といえるような動きがすぐに始まったわけではなかった。しかし、平成21年度に小中両校で「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U（以下Q-U）」を活用したことがきっかけとなり、小中連携の取組を推進していくことになった。さらに、平成22年度からはQ-Uに加えて「学びの協同体」を連携の柱として取り入れた。平成22年度の取組の成果としては、以下の4点が挙げられる。

- ① 中学校において不登校生徒が減った。
平成21年度末6名→平成22年度末2名
- ② 教員が「Q-Uは児童生徒理解に役立つ」という認識を持つようになった。
- ③ 校内研修で学習した構成的グループエンカウンターをもとに、小中9年間の連携グループエクササイズ計画が完成し、学級づくり・仲間づくりに生かされている。
- ④ 今まで3月末に一度だけ行われていた小・中連絡会を5月初めにも持ち、気になる子どもの現在の様子や小学校の時の様子、手立てなどについてQ-Uのプロットも念頭に置きながら、話す機会を持つ等、小中連携を一步進めることができた。

また、課題としては、次の3点が残った。

- ① 全国学力学習状況調査や、標準学力テストに見られる基礎学力が不足していること。
- ② 不登校や別室登校の児童生徒がゼロではないこと。
- ③ 家庭的に複雑な事情のある子どもが多く、小学校からのもつれた人間関係のまま中学校に持ち上がってきて、なかなか解消されないケースが多いこと。

2 研究の目的

上記のように、平成21年度からの取組に一定の成果が認められており、本研究を継続していけば、まだはっきりした成果の認められてない学力の問題や、子どもたちの人間関係にも成果が現れるのではないかと考えた。また、「学びの協同体」では、グループ学習が中心となるため、子どもたちの人間関係が良くなければ学びが成り立たない。学び合いのためには、信頼して何でも言える雰囲気が必要である。そこで、学びの土台づくりとして、Q-Uが大いに活用できるであろうと考えた。

以上のことから、今年度もさらなる小中連携を目指し、Q-Uを活用しながら、個と集団への効果的な支援の在り方を研究していくことになった。

3 研究の内容

(1) 研究の経過

ア Q-Uを中心とした取組

	越知小学校	越知中学校	越知町教育委員会
4月			Q-U注文、配付手配。グループエクササイズ小中連携計画を配付
	小中連携 Q-U 担当者会		
5月			第2回小中連絡会の資料として小学校6年生のQ-U結果を配付
	第2回小中連絡会		
		1年生全員 Q-U を基にスクールカウンセラーと面談～7月まで	
6月	第1回Q-U実施	第1回Q-U実施	第1回Q-U後、昨年のデータを引継として新担任に配付
	小中合同Q-U分析検討会		
7月		総括職員会 支援を要する生徒情報交換会	
8月		小中合同研修会 講師：名城大学 曾山和彦 准教授	
	のびっこ（支援を要する児童情報交換会・Q-U活用）		
9月		2年生全員 Q-U を基にスクールカウンセラーと面談～12月まで	
10月	第2回Q-U実施		
11月	Q-U分析検討会	第2回Q-U実施 Q-U分析検討会	第2回Q-Uのデータを保管
12月		総括職員会 支援を要する生徒情報交換会	
	小中連携 Q-U 担当者会		
2月	のびっこ		
3月		総括職員会 支援を要する生徒情報交換会	
	第1回小中連絡会		第1回小中連絡会の資料としてQ-U結果を配付

イ「学びの協同体」の取組

	越知小学校	越知中学校	越知町教育委員会
5月	全校研（講師：人権啓発センター専門指導員、元土佐町中学校長 竹村元一先生）		全校研案内の送付
	小中連携 学びの協同体 担当者会		
6月		小中連携 中学校 公開研究授業 講師：元静岡県熱海市立多賀中学校長 深沢幹彦先生	
	全校研（講師：竹村元一先生） 先進校視察（高知市立一ツ橋小学校14名）		全校研案内の送付

7月	全校研(講師:竹村元一先生) 先進校視察(静岡県富士市立 広見小学校2名) 授業づくり・学校づくりセミ ナー(滋賀県大津市14名)	学年研	全校研案内の送付 授業づくり・学校づくりセミナー に同行
9月		全校研	全校研案内の送付
10月	全校研(講師:竹村元一先生)	全校研 先進校視察(土佐清水市立清水 中学校1名)	全校研案内の送付 清水中学校視察に同行
11月	全校研(講師:竹村元一先生)	先進校視察(静岡県富士市立田 子浦中学校13名)	全校研案内の送付 田子浦中学校視察に同行
小中連携 小学校 公開研究授業 講師:元静岡県熱海市立多賀中学校長 深沢幹彦先生			
12月		全校研	全校研案内の送付
1月	全校研(講師:竹村元一先生)	全校研	全校研案内の送付
小中連携 学びの協同体 担当者会			
2月		全校研	

(2) 具体的な取組

ア 個への取組図る

小学校では支援の必要な児童についての情報共有を目的に、8月と2月に職員会で「のびっこ」という時間を持っている。その際、今年度はQ-Uの結果も参考にした。

「のびっこ」の取組では、担任から見て気になる児童のことを報告するが、特別な支援の必要な児童については、個別の指導計画を作成し、誰が担任しても経過が分かるように、その児童が卒業するまでは加筆・保管するようにしている。

中学校では、毎学期末の総括職員会において、気になる生徒や支援の必要な生徒について、Q-Uの結果も含めて現状の報告をおこなっている。また、随時、状況によっては支援会を持ち、情報の共有と支援策を検討している。

「温かい学級づくり応援事業に関する調査票」より、Q-U実施後の具体的な手立てとして、担任が実施した取組を以下にまとめる。(小学校12名、中学校6名、計18名の回答より)

<ul style="list-style-type: none"> ・学級全体への声かけや指導の工夫 14名 ・授業の展開の工夫 8名 ・朝の会、帰りの会の工夫 6名 ・係活動の工夫 1名 ・朝読書や読み聞かせ 1名 ・構成的グループエンカウンター等の人間関係づくり を目指した活動 11名 	<ul style="list-style-type: none"> ・行事への取組 7名 ・個々への声かけ 11名 ・個人面談や個別のかかわり 3名 ・日記等でのかかわり 6名 ・チーム支援会や校内支援会で活用 3名 ・家庭との連携で活用 2名 ・ゲームや遊び 5名
--	---

イ 集団への取組

集団への取組として、今年度、小学校において実施したグループエクササイズの抜粋を次に示す。

	ねらい	実施したグループエクササイズ
低学年	他者理解を深める	・夏休みビンゴ ・今年の3大ニュース私バージョン 学校以外の友だちのことを知り、楽しんでいた。
	友だちの良いところを見つける	・「ありがとう」「どういたしまして」カードの交換 運動会の後で、協力したことや教えてもらったことを振り返り、カードの交換をした。
	友だちともっと仲良くなる	・自己紹介ゲーム ・いいところ見つけ
	自分を発信する	・みんなでリズム みんなノリノリで楽しくできた。
中学年	他者理解を深める	・夏休みビンゴ ・今年の3大ニュース私バージョン 学校以外の友だちのことを知り、楽しんでいた。
	友だちの良いところを見つける	・「ありがとう」「どういたしまして」カードの交換。 運動会の後で、協力したことや教えてもらったことを振り返り、カードの交換をした。
	自分の新たな一面に気付き自己肯定感を高め、温かい人間関係をつくる	・大切なあなた 友だちから自分が思ってもいなかった長所を言われて、とてもうれしそうだった。
高学年	友だちの良いところを見つける	・いいとこ四面鏡 毎回席替えの直前にこれまでの班の友だちと行う。毎回もらうときはうれしそう。
	自分が友だちからどう思われているか知る	・いいとこ四面鏡 書いて渡されたら、それをじっくりとうれしそうに見ている。
	友だちの良いところを発見	・友だちの良いところを見つけ生活カードに書く。それを通信に載せる。全員分を行う。
	望ましい人間関係の形成	・すごろくトーキング～6年間を振り返ろう～ 友だちの話を聞かない場面が見られたので、その都度ストップして聞き方について確認した。小学校生活を楽しく振り返ることができた。班で少しやった後、学級全体でも行った。

この他にも、「授業や帰りの会で自分の思いを話せる場を作った」「帰りの会の終わりにレクを行い、楽しい気分や明るい雰囲気にしてさようならをするようにした」「担任が意識的に子どもの話を聞くよう努めた」「全員が発言できる場を作った」「分からないことが出せる場を作った」「誕生日に牛乳乾杯をして祝った」「友だちの発言を最後まで聞く指導を心がけた」「自分の考えを言葉で表現して相手に伝えさせるように心がけた」「行事のたびに目標を設定させ、それに向かって友だちと協力させた」といった、日ごろから継続して行っている取組についても報告があった。仲間づくりを中心にした学級経営が、学校を挙げて行われていることも、学校生活満足群の増加にかかわっていると思われる。

4 成果と課題

(1) 児童生徒の変容

ア Q-Uの結果から見られる変容

(ア) 学級生活満足群の増加

本年度実施のQ-Uにおいて、小学校、中学校ともに1回目より2回目の学級生活満足群が増加した。

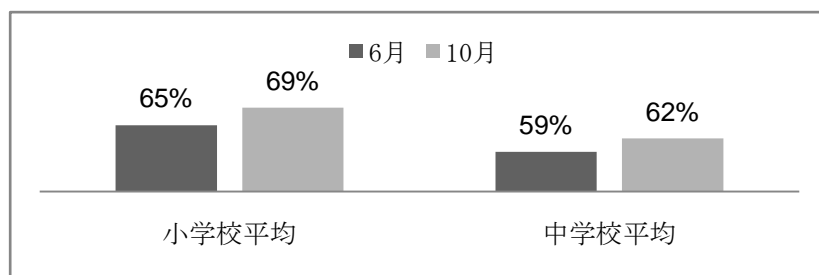


図1 学校生活満足群の割合（6月・10月）

また、小学校、中学校ともに、学級生活満足群の割合が高いことも、特徴的と言える。10月実施のQ-Uでは、表1のような結果になっている。

表1 越知小学校・中学校のQ-Uプロット図4群の割合（10月）

侵害行為認知群	低学年	11%	学級生活満足群	低学年	58%
	中学年	2%		中学年	74%
	高学年	17%		高学年	66%
	全国平均	18%		全国平均	38%
	中1年	9%		中1年	77%
	中2年	13%		中2年	55%
	中3年	9%		中3年	54%
	全国平均	17%		全国平均	37%
学級生活不満足群	低学年	19%	非承認群	低学年	12%
	中学年	11%		中学年	13%
	高学年	7%		高学年	10%
	全国平均	26%		全国平均	18%
	中1年	8%		中1年	12%
	中2年	10%		中2年	23%
	中3年	16%		中3年	23%
	全国平均	25%		全国平均	21%

児童生徒は学年が上がるにつれて落ち着き、学習意欲が高くなることを感じる。また、人の立場に立って考えることができる、他者に優しい、人と協力できる等、上級生ほど精神的な面でも成長していることを実感する毎日である。

理由としては、地域性等もかなりあると思われるが、「学びの協同体」の取組により授業で自分の居場所があること、他者とのかかわりの中で学習に取り組んでいるため、学習意欲が向上し、他者とのかかわりを自然と身に付けているのではないだろうか。

実際、全国学力・学習状況調査での「普通の授業では、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思いますか」という質問項目に対する回答で、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計は、平成21年度以降図2のように伸びている。授業改善が進み、子どもたちも他者とのかかわりの中での学び合いを自覚していることが分かる。

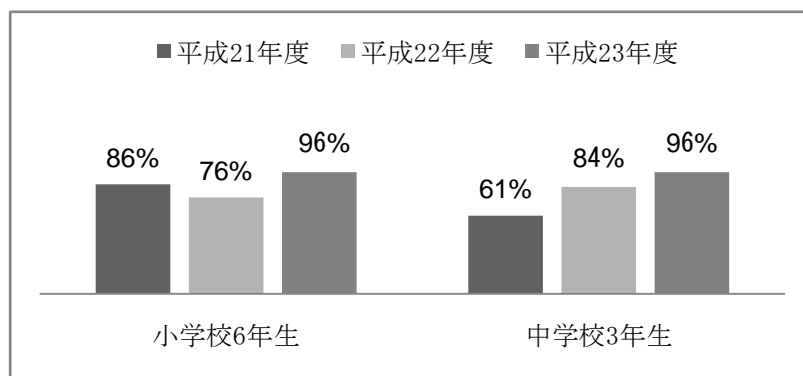


図2 全国学力・学習状況調査「普段の授業では、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思いますか」という質問項目に対する肯定的回答の割合

(イ) 要支援群の児童生徒への支援体制の確立

小学校、中学校ともに、要支援群に位置する支援の必要な児童生徒も数名がいるが、現在のところ不登校等には至っていない。

合同研修会での「Q-U の分析結果をもとに、どのような取組を行いましたか」という質問項目について「要支援群の児童生徒に意識的に声がけをしたり、ほめたりした」「自分や友だちの良いところ探しの活動を行った」と多くの教員が回答している。また、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを行った教員も多い。要支援群の児童生徒への取組はもとより周りの児童生徒も育てていくことを大切にしていることが分かる。小学校、中学校ともに分析検討会を全教職員で行い、情報を共有している。苦戦している児童生徒への支援も担任だけが行うのではなく、組織として対応するようになってきている。このような取組により、要支援群の児童生徒も深刻な事態にならずに登校できているのではないだろうか。

イ 不登校状況の改善

不登校の状況は、表2に示すように小学校、中学校共に減少してきている。

表2 越知小中学校、中学校の長欠不登校児童生徒数

校種	年 度	長欠児童生徒数 (人)	不登校児童生徒数 (人)
小学校	平成 21 年度	0	0
	平成 22 年度	1	1
	平成 23 年度	0	0
中学校	平成 21 年度	6	3
	平成 22 年度	3	3
	平成 23 年度	3	2

ウ 学力の伸び

平成 23 年度の全国学力テストの結果を見ると、小学校では昨年度の結果と比較すると、国語で9点、算数で6.5点上昇した。また、中学校では昨年度の結果と比較すると、国語で14.5点、数学で9.5点上昇し、小学校、中学校ともに学力の向上している。このことは、

授業を通して、人間関係を大切にしながら学び合いを進めてきた成果であろう。

(2) 教員の変容

「温かい学級づくり応援事業に関する調査票」より、平成23年度の教員の意識調査の結果を表3にまとめた（小学校12名、中学校6名、計18名の回答より）。小学校1年生においては、Q-Uの質問の意味が十分に伝わった結果となったかどうか、測りかねるという不安要素もあり、低学年においては2の評価があったものの、おおむね肯定的意見の3と4が多数であった。

表3 越知小学校、中学校教員のQ-Uに対する意識調査結果（人数）

	4=あてはまる、3=ややあてはまる、2=あまりあてはまらない、1=あてはまらない	4	3	2	1
①	Q-Uの実施や集計のしかたについて、理解できた。	16	2	-	-
②	Q-Uの結果を分析して、個々の児童生徒の課題をつかむことができた。	5	12	1	-
③	Q-Uの結果分析をもとに、個々の児童生徒についての具体的な支援の手立てを考えて対応することができた。	3	12	3	-
④	Q-Uの結果を分析して、学級経営における課題をつかむことができた。	5	11	2	-
⑤	Q-Uによる児童生徒理解・学級理解をもとに、授業における教師の支援やかかわり方を見直している。	6	9	3	-
⑥	Q-Uによる児童生徒理解・学級理解をもとに、研究授業等に生かしている。	4	11	3	-
⑦	人間関係づくりのプログラムなどを日常生活の取組に生かしている。	2	9	7	-
⑧	Q-Uの結果について、校内研修会を開くことができた。	16	2	-	-
⑨	Q-Uについて、複数回の結果を比較・検討し、②～⑦の取組について検証を行うことができた。	7	10	-	1

また、各校の学級経営方針や目指す学級像について、抜粋を表4にまとめた。小中学校ともに、すべての教員が、仲間づくりを中心に据えた学級を目指していることが分かる。

表4 越知小学校、中学校の各学級経営方針、目指す学級像

	越知小学校	越知中学校
低学年	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの居場所がある学級 間違いが認められる明るく開かれた学級 何でも話せる、できた喜びを味わう、友だちと一緒に伸びる 自分も友だちも大切にすること 気付き、考え、行動する子 最後までがんばる子 分からないところがあると、友だち同士助け合いみんなで伸びていこうとする学級 	<ul style="list-style-type: none"> 1 お互いを認め合い、かかわりながら学び合える学級 自ら考え、適切に判断し、行動できる学級 日々の生活の中で、友だちの良さを発見し、お互いに認め合える居心地の良い学級 積極的に自らの意見を言えるような雰囲気をつくり、他の意見を聞き入れ、考え、行動できる集団 日々の活動の中で、何事も相手の立場になって考え、行動のできる生徒の育成
中学年	<ul style="list-style-type: none"> 2 友だちのしんどさや頑張りに気付き、認め合える学級 協力し合える学級 友だちの良さを認めることのできる学級 お互いの良さを認め合う 友だち同士助け合う、かかわり合いのある学級 	<ul style="list-style-type: none"> 2 お互いを認め合い、かかわり合い、学び合える学級 継続した取組のできる学級 日々の生活のいろいろな活動の中で、友だちの良さを発見し、お互いに認め合える関係をつくる 班活動や学級活動、行事を通して、思いやりの心を持ち、お互いに認め合い尊重し合える態度を育てる ともに高め合える集団
高学年	<ul style="list-style-type: none"> 3 一人ひとりの良さを認め合い、協力して活動する学級 集団でまとまって努力し、目標の達成に向かってがんばれる学級 友だちを大切にできる学級 	<ul style="list-style-type: none"> 3 自ら考え判断し、表現できる学年 仲間や下級生に接する態度や言葉遣いを指導し、互いに認め合い仲間を大切にする学級を目指す 場に応じた態度で、意欲的に協力、判断し活動する 根気よく、自分の課題や友だちと向き合う

(3) 教育委員会の支援体制の確立

小中連携を進める柱のひとつとして、Q-Uを推進していく体制が整ったことは、越知町の大きな成果と言える。1年間を通して、小中学校をどのように支援していくかの流れが確立したことは、今後のQ-U事業の継続において、意義が大きい。

- ・小中連携グループエクササイズ年間計画の完成、毎年の配付
- ・年2回のQ-U実施については今後継続して町で予算化
- ・Q-Uのデータはすべて委員会で保管（CDにて提出）
- ・昨年度のプロット図は、6月のQ-U結果が出たあとに、新担任へ引き継ぐ
- ・連携推進委員会の部会としてQ-U担当者会を置き、Q-U事業を推進
- ・経年比較をおこない、要支援群の児童生徒についてはQ-U担当者会や校長会にて情報共有
- ・小6から中1への引継連絡会に、Q-Uのデータを提供
- ・必要に応じて、スクールカウンセラーへのQ-Uデータの提供

(4) 小中連携の促進

表5 Q-Uに関する小中学校合同研修会

期 日	講 師	内 容
H22. 7. 29	名城大学 准教授 曾山和彦 先生	「かかわりの力をはぐくむ支援のあり方について」 「学級集団づくりにおける具体的な支援方法について」 「特別な支援の必要な児童への対応について」
H22. 11. 24	名城大学 准教授 曾山和彦 先生	「小6の事例研究」 「中1の事例研究」 「Q-Uを活用した小中連携の在り方について」
H23. 6. 15	高知県 心の教育センター	「1回目Q-Uの分析の視点・ポイント」 「中学1年生の事例について」 「学年別分析支援検討」
H23. 8. 18	名城大学 准教授 曾山和彦 先生	「小学校の学級集団づくりについて」 「中学校の学級集団づくりについて」 「より一歩進める連携を目指して」

5 おわりに

研究1年目の課題であった、組織として取組を進めるという点については、教職員間で課題を共有する意識も高まり、この1年間でかなり前進したといえる。小中連携についても、お互いの教員が、学びやQ-Uに関連して顔を合わせる機会も増え、徐々に進んできているのを感じる。こういった取組の結果、上述したような成果が現れてきたと言える。ただ、小中連携については、単に教員が集まって会を持つことだけが連携ではないといった意見もあり、今後は、児童生徒を中心とした連携の在り方を検討していく必要も出てきた。越知の子どもたちをみんなで力を合わせて育てていくという視点を中心に据えて、今後も小中連携を進めていきたいと考えている。